

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 19 日現在

機関番号：30102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720053

研究課題名（和文） 近代都市と天使絵図の諸相：1920-30年代ドイツにおける、精神史としての絵画史

研究課題名（英文） The modern city and various aspects of the artistic figures of „angels.“ The history of painting as spiritual history in 1920s and 1930s Germany.

研究代表者 松友 知香子（MATSUTOMO CHIKAKO）

札幌大学・文化学部・講師

研究者番号：50462289

研究成果の概要（和文）：

本研究では、以下の3項目についての研究を行った。まず1920年、30年代ドイツにおける芸術表象としての〈天使〉と近代都市の関係性の考察である。パウル・クレーとエルンスト・バルラハの両作品における〈天使〉の造形は、美しいキリスト教の天使像から逸脱し、近代的な造形へと還元される一方で、〈都市〉という生活世界で苦悩する人間の内面を映す媒体として天使像が選ばれたことを確認した。次にフィリップ・オットー・ルングの版画作品『一日の諸時間（Die Zeiten）』を取り上げ、〈天使〉と〈子ども〉の関係性について考察を行った。この作品は〈時〉の循環を、連作という形式で実現し、各作品は中央部分とそれを取り囲む枠の二重構成となっているが、その中央部分に〈天使〉が唯一登場する「夜」に着目し、ルングの意図する「最後の審判」としての『夜』の意義づけと、〈天使〉と〈子ども〉の造形的特徴と身振りの分析から、両者の関係性を解釈しようと試みた。この十全な解釈には、本作品に先行する『アモール神の凱旋（Der Triumph des Amor）』における〈アモール神（クピド）〉と人間の諸段階（幼少期、青年期、壮年期、老年期）を表象する〈子ども〉の考察が不可欠であり、そしてバロック・ロココ的な愛の神クピドではなく、ギリシア神話に由来する原初神エロスとしての解釈が成立するかということが次の課題になることを確認した。最後に現代社会における〈天使〉表象を考察した。当初の計画では、現代日本のサブカルチャーにおけるキッチュな〈天使〉や人造人間としての〈天使〉を主な対象とする予定であったが、その領域が広範囲にわたることが判明したため、ドイツ文化圏における天使像に限定し、先行する研究との連続性から、ヴェンダースの1987年の映画『天使の詩（Der Himmel über Berlin）』を対象とした。この作品には、キリスト教の天使や図像から派生した様々な天使を集約した〈天使ダミエル〉と〈天使カシエル〉が登場する。有限の時間を生きる〈人間〉の運命に〈天使〉が共鳴するというストーリー展開であり、そこには、かつての〈天使〉に対する人間の憧憬の反転が見られる。これを近代の「倒錯」と見るか、それとも〈天使〉の本来の姿と見るかについては、結論は保留としたい。

研究成果の概要（英文）：

I have pursued three issues in my study: First, the relationship between the artistic representation of the „angel“ and the modern city in 1920s and 1930s in Germany. In the works of Paul Klee and Ernst Barlach, I can confirm that they deviate in depicting angels

from the traditional Christian images of angels. These images were chosen by the artists above as the medium in which the spiritual problems of human suffering in the modern world are reflected.

Second: I have researched the works of Philipp Otto Runge to reflect on the relationship between the „angel “ and the „child “. The works „Time’ s (Die Zeiten) “ is a series of circles of „time “ in a day, and each piece consists of a central part with the frame surrounding it. I have brought the „night “ into focus in which the „angels “ appear. Starting from reflecting on the „night “ as the „Last Judgement “ and on the gestures of the „angels “ as well as of the „children “, I tried to interpret the relationship between the „angel “ and the „child “. It has become clear that for a full interpretation of this work the study of the „children “ representing the various stages of human beings (childhood, adolescence, late middle age, old age) and Amor in “The Triumphs of Amor(Der Triumph des Amor)” is indispensable.

Lastly, I reflected on the representation of the „angel “ in modern society. In continuity with my previous studies I have chosen the „angel “ in German cultural spheres, focussing on „The Sky Over Berlin “ (Der Himmel über Berlin), a film by Wim Wenders in 1987. In this film, an angel comes into play whose figure consolidates various iconographic images of angels throughout Christianity. The story shows how the „angel “ sympathizes with the destiny of the „human beings “ who live for only a finite time. A reversal of the admiration for „human beings “ for the „angel “ is seen in this story.

Any conclusion as to whether this representation of „angel “ is a perversion of the modern age, or if it shows „angel “ in its original form is put on hold.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論

1. 研究開始当初の背景

「天使」に関するキリスト教の教義上の解釈は、ヨーロッパ中世以来の伝統があり、日本でもトマス・アクィナス（1225 頃-1274）の『神学大全』や偽ディオニシウス・アレオパギダの「天上位階論」がすでに邦訳され、

また宗教芸術における「天使」についても、既に数多くの研究が蓄積されているが、本研究ではこういった思想史との関連も念頭に入れて、「近代都市」という世俗的な場で展開した近代芸術における「天使」モチーフの、精神的な意味の究明を試みる。先行する研

究において、20世紀初頭の宗教的なモチーフは、芸術家の反近代的な神話的要素の現れとして、個人の内面に根ざした一過性の現象のごとく語られていたが、1920年代後半から30年代にかけてのヨーロッパ（特にドイツ）では、実に様々な芸術家が「天使」をテーマにした作品を残している。たとえば画家パウル・クレー（1879-1940）、彫刻家エルンスト・バルラハ（1870-1938）、社会批評家ヴァルター・ベンヤミン（1829-1940）、詩人ライナー・マリア・リルケ（1875-1926）、映画監督スタンバーグ（1894-1969）などである。これらの幅広い芸術ジャンルを横断する仕方で芸術家を動かした「天使」モチーフの精神史的な意義を、「近代都市」というもう一つの共通要素との関連で考察することができるのではないかというのが、研究当初の背景である。

2. 研究の目的

(1) 本研究で最初に取り上げる芸術家の一人、パウル・クレーは、晩年にナチス政権からの迫害のためにスイスに亡命したが、病床のなかで数多くの「天使」画を制作した。彼の「天使」画については、美術史や精神医学的な立場から、実証的な研究が試みられているが、クレーの天使たちは、クレーの個人的な領域や人間一般の深層心理に限定されるのではなく、もう少し広い精神史的な地平において考えるべき余地が残されているように思われる。ヨーロッパでは、キリスト教の神が精神的かつ社会的な「中心」をなしたが、やがてそれが教会と世俗社会の二つの中心に分裂し、近代社会の成立とともに、世俗社会の側が肥大したこと、したがって芸術においても宗教画は、もはやかつてのような様式創造力を保ちえなくなると、ハンス・ゼーデルマイヤー（1896-1984）は指摘している。自律した精神に対して、キリスト教を支える

神やその使者たちは、近代芸術において、たとえばドーミエ（1808-1879）の描くカリカチュア化された神話となった。しかし彼の反近代の研究視座から抜け落ちがちになるのは、本研究が対象とする「都市」の積極的な意味づけと、「天使」モチーフの非宗教的方向への変貌である。この点に関しては、クレーの「天使」画の前段階として、数多くの「都市」画が描かれていたことがこれまでの筆者の研究によって明らかになっており、クレーにおいて「都市」と「天使」という二つのモチーフは、緊密に関係するはずである。その関係性を究明することが、本研究の第一の目的である。

(2) 「近代都市」と「天使」の関係を別の方向から解明するべく、クレーと同時代の彫刻家エルンスト・バルラハの作品を次の考察対象とする。バルラハについては、本国での研究成果を日本ではまだ十分に消化しきれておらず、本研究では、特に1927年の「ギュストロー戦没者記念碑（別名「Der schwebende Engel（浮遊する天使）」）」に注目する。この作品は、ナチス政権から「退廃芸術」の烙印を押され、撤去後に溶解されてしまいが、現在では残された鋳型から再現された作品が、ギュストローとケルンの聖堂に収められている。この作品は、彫刻とはいえ、聖堂内に吊られた展示形態をとり、中世以来の伝統の継承を意味するが、そういった伝統性に比して、天使の造形的特徴は伝統性から大きく逸脱している。そのギャップから浮かび上がるのは、バルラハの近代人としての精神であって、この部分に焦点を合わせて、バルラハにおける「天使」と「都市」という二つのモチーフの関係性を究明し、日本におけるバルラハ理解を促進させることが第二の目的である。

(3) 第三の目的は、ドイツ文化圏の近代の「天使」モチーフの歴史的な源泉を究明することである。具体的には、ドイツ・ロマン主義における「都市」と「天使」について、画家フィリップ・オットー・ルンゲ(1777-1810)の、「新しい神話」としての作品を対象とする。ルンゲの芸術観および色彩論を手がかりとして、近代社会の勃興期から、1920、30年代に至る芸術史のなかで、これまで見落とされてきた、「都市」と「天使」の関係性の変遷を跡づけたい。

(4) 研究の最終目的として、現代社会の動向を考察の対象とする。なぜなら「都市」と「天使」モチーフは、現代社会においても重要な芸術テーマの一つであり続けているからである。現代の商業主義的なサブカルチャーのなかで、「天使」はキッチュなものとして、あるいは最新テクノロジーを駆使したロボットの形態で表象されることが多い。現代社会に溢れる多様な「天使」イメージを俯瞰したうえで、映画監督ヴィム・ヴェンダース(1945-)の映画『Der Himmel über Berlin (1987年)』に登場する天使を取り上げる。近代ドイツの歴史が刻み込まれたベルリンという都市を舞台にして、天使が人間へと生まれ変わるストーリーは、本研究を総括するうえで有益な視座を与えてくれると思われる。

3. 研究の方法

本研究は、基本的には思想史の当該部分の研究を行い、それと同時に理論的に整備するという手順で展開する。歴史研究としては、まず資料やデータを収集することが不可欠である。また理論的な構築は、基本文献の渉猟が中心となる。研究目的(1)・(2)・(3)に

関しては、スイス(ベルン)およびドイツ(ベルリン、ワイマール、デッサウ、ハンブルク、ギュストローほか)で作品調査および資料収集を行う。そしてこの時期のドイツ文化圏における宗教性の意味について、哲学・美学の領域での諸文献を渉猟し、その研究状況を概観する。特にウエールツブルク大学で「ウエールツブルク現象学」ともいうべき流れをつくったハインリッヒ・ロムバッハ(1923-2004)が先導しており、このロムバッハの研究を把握、敷衍するかたちでクレーの「天使」の理解が重要となる。彼の著作 *Leben des Geistes*, 1977 や *Welt und Gegenwart*, 1983 (邦訳『世界と反世界』1987年)などの立ち入った解釈作業が中心課題となる。近代芸術の天使像の造形的な特徴であるが、「(女性)性」と「醜さ」が挙げられる(上述のバルラッハの「浮遊天使(1927年)」は、ケーテ・コルヴィツ(1867-1945)の面影が指摘されている)。以上のキーワードを念頭におきつつ、ドイツにおける最新の研究成果を渉猟しながら、本研究に関する現象学的方法の確立をめざす。研究目的(4)について：ヨーロッパ文化圏のみならず、非ヨーロッパ圏の先進諸国の文化のなかにも、しばしば登場する「天使」は、キリスト教的な意味内容を失ったかのようにみえる。「天使」は、いったい何を象徴しているのだろうか。そこに現代の「新しい神話」の到来を見ることができのだろうか。こういった問いの答えを追求し、近現代社会における宗教性、神話性について考察する。現代の芸術家たちの創造する「天使」は、本研究で触れた18世紀以降のドイツ文化圏に現れた近代の「天使」像と関係があるのか、あるとすればどのような関係にあるのか、等々の諸問題を理論的に浮彫りにしてゆく。

4. 研究成果

本研究では、以下の3項目についての研究を行った。まず1920年、30年代ドイツにおける芸術表象としての〈天使〉と近代都市の関係性の考察である。パウル・クレーとエルンスト・バルラハの両作品における〈天使〉の造形は、美しいキリスト教の天使像から逸脱し、近代的な造形へと還元される一方で、〈都市〉という生活世界で苦悩する人間の内面を映す媒体として天使像が選ばれたことを確認した。次にフィリップ・オットー・ルンゲの版画作品『一日の諸時間 (Die Zeiten)』を取り上げ、〈天使〉と〈子ども〉の関係性について考察を行った。この作品は〈時〉の循環を、連作という形式で実現し、各作品は中央部分とそれを取り囲む枠の二重構成となっているが、その中央部分に〈天使〉が唯一登場する「夜」に着目し、ルンゲの意図する「最後の審判」としての『夜』の意義づけと、〈天使〉と〈子ども〉の造形的特徴と身振りの分析から、両者の関係性を解釈しようと試みた。この十全な解釈には、本作品に先行する『アモール神の凱旋 (Der Triumph des Amor)』における〈アモール神 (クピド)〉と人間の諸段階 (幼少期、青年期、壮年期、老年期) を表象する〈子ども〉の考察が不可欠であり、そしてバロック・ロココ的な愛の神クピドではなく、ギリシア神話に由来する原初神エロスとしての解釈が成立するかということが次の課題になることを確認した。最後に現代社会における〈天使〉表象を考察した。当初の計画では、現代日本のサブカルチャーにおけるキッチュな〈天使〉や人造人間としての〈天使〉を主な対象とする予定であったが、その領域が広範囲にわたることが判明したため、ドイツ文化圏における天使像に限定し、先行する研究との連続性から、ヴェンダースの1987年の映

画『天使の詩 (Der Himmel über Berlin)』を対象とした。この作品には、キリスト教の天使や図像から派生した様々な天使を集約した〈天使ダミエル〉が登場する。有限の時間を生きる〈人間〉の運命に〈天使〉が共鳴するというストーリー展開であり、そこには、かつての〈天使〉に対する人間の憧憬の反転が見られる。これを近代の「倒錯」と見るか、それとも〈天使〉の本来の姿と見るかについては、結論は保留としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 松友知香子、「パウル・クレーの〈天使〉について—〈都市画〉との関連から」、『美学』、査読有、第223号、2008年、pp. 86-99.
- ② 松友知香子、「〈工場萌え〉の考察—現代技術の美学的諸問題」、『文明と哲学』、査読有、第1号、2008年、pp. 76-85.
- ③ 松友知香子、「イリュージョンの美学」、『文明と哲学』、査読有、第2号、2009年、pp. 128-139.
- ④ 松友知香子、「黙示録としてのコンピュータ芸術/技術」、『文明と哲学』、査読有、第3号、2010年、pp. 129-137.
- ⑤ 松友知香子、「ルンゲの『一日の諸時間』における〈天使〉と〈子ども〉」、『比較文化論叢』、査読無、第27号、2012年、pp. 1-16.

[学会発表] (計3件)

- ① 松友知香子 「メディア・アートのイリュージョン性」意匠学会 2010年8月1日 関東学院大学
- ② 松友知香子 「フィリップ・オットー・ルンゲにおける形象の修辞学」国際修辞・コミュニケーションフォーラム 2011年10月29日 札幌大学
- ③ 松友知香子 「フィリップ・オットー・ルンゲの『一日の諸時間 (Die Zeiten)』における〈天使〉と〈子ども〉」 文芸学研究会 2012年5月19日 神戸女学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松友 知香子 (MATSUTOMO CHIKAKO)
札幌大学・文化学部・講師
研究者番号：50462289